〈血縁〉の家族社会学

――現代の事例を分析するための新たな枠組みへ向けて――

高知県立大学　　野辺陽子

1　目的

本報告の目的は，（家族）社会学における「血縁」の捉え方の限界を指摘し，「血縁」を分析するための，新たな枠組みを提案することにある．古くは養子縁組，近年では生殖補助医療などを事例に親子と「血縁」の関係が分析されてきた．戦後，子どもとの養子縁組は減っており，一方で生殖補助医療の利用が拡大していることから，「日本人は，戦前は血縁にこだわらなかった（＝養子縁組が多かった）のに，現代では血縁にこだわるようになった（＝養子縁組が少ない）」という指摘がしばしばなされる（cf.岩本 2006）．このような指摘は，「非血縁親子を形成する＝血縁にこだわらない」「非血縁親子を形成しない＝血縁にこだわる」という解釈図式に基づいている．本報告は，この解釈図式を問い直し，代替案を示すものである．

2　方法

本報告では，上述した解釈図式を再考するため，養子縁組の研究をレビューした．レビューしたのは，養子縁組の制度もしくは当事者（養親・養子）を扱っている研究であり，法社会学，歴史人口学，家族社会学，社会福祉学などの研究である．先行研究が，養子縁組の何（法制度か実態か）を対象にどのような指標を用いて「血縁」について議論しているのかを検証した．

3　結果

先行研究のレビューから発見されたのは，第一に，養子縁組と「血縁」の関係を解釈する際の水準／指標／基準の多様性である．養子縁組の制度／実態を対象とするか，どの指標を用いるか，制度の原則に着目するか例外に着目するか，さらに何（社会，時代，地域，階層）と比較するかなどによって，「血縁」の強弱に関する解釈が異なっていた．また，歴史人口学の研究の中には，戦前の日本でも「血縁」への志向性があった（のに、人口学的な理由で養子縁組をしていた）とする研究も存在していた．第二に，循環論的な図式の中で養子縁組と「血縁」を説明する記述がしばしば散見された点である．「血縁」にこだわるから養子縁組しないということを指摘しながらも，そこで「血縁」へのこだわりは証明されず，結局，養子縁組しないという事実が「血縁」へのこだわりの証左となっていることがあった．第三に，養子縁組に至る／至らない当事者の意識が主題化されない点である．養子縁組しないことが「養子縁組をしたくない」のか，「養子縁組したくてもできない」のかなど，養子縁組に至る／至らないまでの様々な意識の違いが捨象されて議論されていた．

4　結論

以上の検証から，①日本では養子縁組が多かった（＝血縁にこだわらない），②養子縁組しない（＝血縁にこだわる）という解釈図式はかなり事象を単純化したものであり，限界があることがわかった．本報告では，昨今の「多様な親子」の状況を踏まえて，「血縁」を「当該社会において社会的・文化的に形成された生殖や世代継承についての知識や社会通念」としてとらえ直し，それらを制度／知／自己・関係性との関連で検証する新たな枠組みを提示する．

文献

岩本通弥，2006，「民俗学からみた新生殖技術とオヤコ――『家』族と血縁重視という言説をめぐって」太田素子・森謙二編 『〈いのち〉と家族――生殖技術と家族 I』早稲田大学出版，75-104.